



イルカ通信

隔月 1 回発行
バックナンバーは無料でダウンロードできます
(下記参照)

「イルカの声聞き分ける」

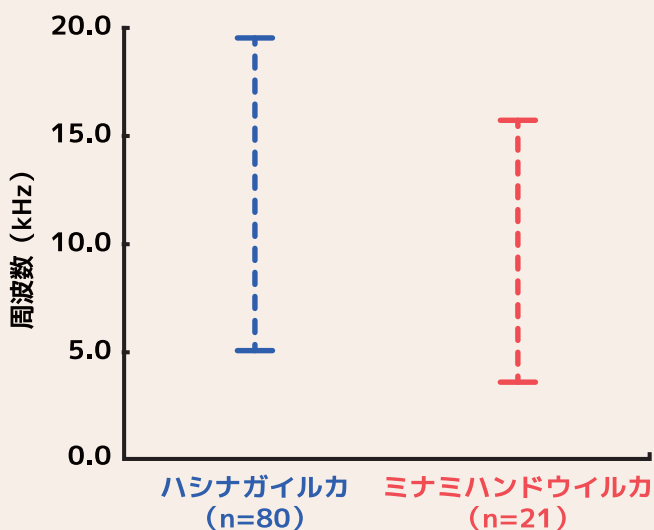
イルカは、「ホイッスル」と呼ばれる口笛のような高く、長い音を使って、仲間同士でコミュニケーションをとっていると考えられています。

父島の沿岸付近に生息しているミナミハンドウイルカやハシナガイルカもこのホイッスルを発していますが、それぞれのホイッスルから種類を判別するには至っていません。そこで、このホイッスルから種類を判別するために、昨年より帝京科学大学と共同で、専用の水中マイクでイルカの音響調査を実施しています。(イルカ通信 No.56)

これまでの解析から、ハシナガイルカのホイッスル周波数は、ミナミハンドウイルカよりも比較的高く、時には 16kHz 以上の高音を出していました。一方、ミナミハンドウイルカは、ハシナガイルカでは確認できなかった 5kHz 以下の低音まで出すことが確認できました。ちなみにヒトの声の周波数は、1kHz 程度とされています。

イルカ同士では、異種間でも同じ周波数帯のホイッスルを出すこともあるため、その持続時間や波形なども併せて解析することで、種類を特定できるようになると考えています。

今後も解析を続けていきますので、新しい事がわかりましたら、またお知らせしたいと思います。ご期待ください。



ハシナガイルカとミナミハンドウイルカの発生周波数範囲 ※森ら(2014)の許可を得て引用・改編

「口についた付着物」

先日、島のガイドさんから、「ミナミハンドウの口のまわりに付着物が付いているようなんだけど、これって何ですか？」との質問を受けました。イルカの体に付くものといえば、コバンザメやエボシフジツボなどが、パツと思いつくかと思います。ただ、お話を聞いた限り、この2つではなさそうなのです。その個体の写真を見せてもらい、個体識別をしたところ、個体識別番号 #273 (♂) であることが分かりました。

イルカ調査でもこの個体に会うことが何回かあったので、口元を撮影したところ、下のような画像が撮れました。



上：2014/7/30 撮影
口の左側の一部に付着物が、口の中から生えているように見える。



下：2014/9/16 撮影
7月の状態と比べて、少し付着物の量が減っている。

文献などで調べた結果、この付着物の正体は、その形態などから、「ミミエボシ」であろうとの結論に達しました。エボシフジツボは皮膚の上に付着するのに対し、ミミエボシは歯など堅い部分に付着するようです。特にコブハクジラの歯やザトウクジラに付着するオニフジツボに付着することが文献などに記載されています。今回、小笠原で確認された個体の写真を見てみると、口の内部から生えているように見えます。そして時間の経過とともに、その量が減っているようにも見えるので、今後もこの個体に注目していきたいと思っています。皆さんも何か珍しい個体を発見したら、OWA までご連絡ください。よろしくお願いします。